

第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 開催結果（速報）

1 大会概要

- ・主催 国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）
- ・運営組織 （一財）全日本ろうあ連盟デフリンピック運営委員会
（公財）東京都スポーツ文化事業団
- ・開催期間 令和7年11月15日（土）～26日（水）【12日間】
- ・種目数 21競技・209種目
- ・競技会場 21会場 ※主に都内会場
サッカー：福島県、自転車（ロード・MTB）：静岡県
- ・参加国・地域 79の国・地域
- ・エントリー参加選手数 3,081名（うち日本選手団270名）
（※参加実績は精査中）

2 主な大会実績

- ・日本メダル獲得数 51個（金：16、銀：12、銅：23）※過去最多
- ・入場者数 競技会場及びデフリンピックスクエア：約33万人
スポーツFUN PARK：約13万人（3日間計）

3 主な都の取組等

○ 大会プロモーションの実施

＜大会の直前・期間中の広報＞

- ・ 競技観戦を促進するため、都庁舎プロジェクションマッピングに大会の動画広告を上映したほか、JR東日本の3路線において、ポスターデザインを活用した車体広告を実施。大会期間中、選手の活躍をSNSにて投稿



車体広告（JR山手線）

＜メディアへのPR＞

- ・ 全日本ろうあ連盟や東京都スポーツ文化事業団と連携し、下記取組を実施
- ・ メディアを通じた大会の魅力発信と大会期間中の円滑な取材・報道の実現に向け、大会直前にもプレスセミナーを開催
- ・ 大会期間中に記者会見を実施（3回）したほか、デフリンピックスクエアでの取組を紹介するメディアツアーを実施（参加メディア数106名）



メディアツアー

○ 子供たちの参画

<子供観戦招待>

- ・ 臨場感あふれる会場での観戦を通じて、スポーツの素晴らしさや夢と希望を届け、共生社会の大切さについて考えるきっかけとなるよう、都内の小中高等学校等の子供たちなど約5万人に競技観戦やデフリンピックスクエアでの体験活動の場を提供
- ・ 子供たちが大会に興味を持ち、デフスポーツやろう文化について学べるよう、ハンドブックや動画等の教材を制作、学校へ事前配布
- ・ 被災地（岩手県、宮城県、福島県及び石川県）の子供たち（引率者も含む）136人も招待。競技観戦の他、都内観光も実施。



子供観戦



被災地の子供たちの都内観光

<子供の運営体験>

- ・ 選手入場時に出迎え等を行うエスコート・ハイタッチキッズや表彰式の運営補助を行う副賞トレイベアラーの機会を、競技観戦と合わせて、ろう学校の子供たちに提供



ハイタッチキッズ

○ UC（ユニバーサルコミュニケーション）技術の活用

<デジタル技術を活用した情報保障>

- ・ デフリンピック史上初めて、UC技術を活用
- ・ 会場アナウンスを日英字幕でビジョンに表示するなど、選手・観客への情報保障を充実



会場アナウンスの表示

<「競技音」を目で見て体感>

- ・ 競技音を視覚的に体感できる「ミルオト」や、競技解説をリアルタイムに字幕化するスマートグラス等の最新技術を競技観戦で活用



ミルオト

<街中における技術の活用・PR>

- ・ 「オールウェルカムTOKYOデフ・スペシャル」として、駅やホテル、商業施設でUC技術等を活用したおもてなしを展開
- ・ デフリンピックスクエアでは、UC技術のショーケースである「みるTech」を開催。多くのメディアや各国選手団、一般客に来場いただき、UC技術の有用性をPR



みるTech

○ 多様な人々の参画

<サインエール>

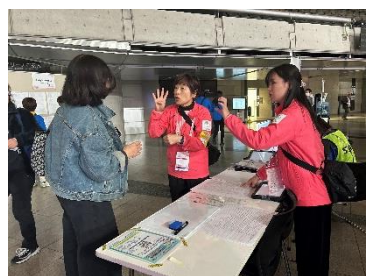
- ・ きこえる・きこえないに関わらず、誰もが一緒に視覚的に応援を届けることができる「サインエール」をろう者やデフアスリートとともに開発
- ・ 大会では、応援を先導するサインエール応援団を結成し、日本代表が出場する試合やメダルセッションを中心に、各会場でサインエールを展開して、会場全体を盛り上げ、選手の活躍を後押し



サインエール

<ボランティア>

- ・ ボランティアレガシーネットワークなども活用して募集を行い、年齢や国籍、障害の有無にかかわらず、多様なボランティアが競技会場等における選手等の案内やIDチェックなどの活動を実施



ボランティア

<スポーツFUN PARK>

- ・ 大会期間に合わせて、競技会場である駒沢オリンピック公園中央広場において、デフスポーツを含むパラスポーツの普及イベントを実施。
(11/22～24の3日間開催：約13万人が来場)
- ・ デフハンドボールや車いすテニス等の体験やパラアスリートとの交流のほか、応援フラッグ作成等により競技会場での応援の盛り上げにつなげた。
- ・ UC技術を紹介するデフ協賛企業等のブースに加え、生活文化局と連携し、SDGsの観点でデフリンピックと親和性の高いエシカル企業のブースも出展。相乗効果で多くの集客につながった。



スポーツFUN PARK



応援フラッグの作成

<オリヒメ（分身ロボット）の活用>

- ・ 大会期間中、現地観戦が困難な重度障害のある方達が分身ロボットを活用して、デフリンピックに参画。特別支援学校や福祉施設から遠隔で競技を観戦したほか、競技観戦の子供たちやスポーツFUN PARK来場者と交流。14施設から218人が参加。



子供たちと競技を応援する様子